

第69回東伏見スポーツサイエンス研究会

日時 2021年6月2日(水) **16:30~18:00**

場所 オンライン開催(Zoom、詳細は案内メールに記載)

演題 合評会『スポーツ人類学 グローバリゼーションと身体』

坂上康博(一橋大学大学院社会学研究科)、

リー・トンプソン(早稲田大学)、中澤篤史(早稲田大学)

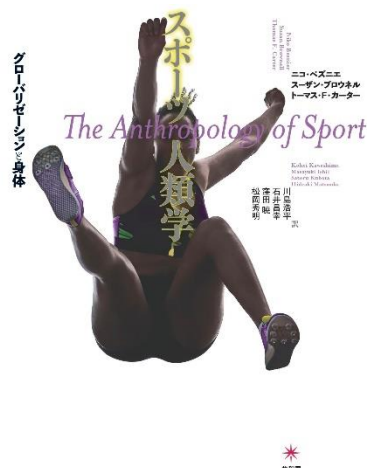
■近代オリンピック運動は本来の姿を失いつつあるとの強い批判に晒され、ブラック・ライブズ・マター運動の渦中で女子プロテニス選手大坂なおみは人種主義に公然と抗議し、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会女性理事比率は40%を超えた。21世紀の最初の五分の一を通過した今、近代スポーツはどこへ向かうのか。

こうしたスポーツ文化現象の現代的争点を深く考えるための好著『スポーツ人類学 グローバリゼーションと身体』(共和国)が昨年翻訳出版された。著者はオランダ、アメリカ、イギリスを研究拠点とするスポーツ人類学者三名、訳者は本学術院に籍を置く研究者を中心とする四名である。本書は現在、「スポーツ文化論」、「スポーツ文化基礎演習」、「スポーツ人類学」などの授業で参考書・教科書として使われる一方、日経新聞書評で評者のひとりから2020年度ベスト3の一つに選定され、国際日本文化研究センター、日本体育大学研究会の合評会で取り上げられるなど、社会や関係者の間でも注目を集めている。

このたびの東伏見スポーツサイエンス研究会では、本書を俎上に載せ、本学の内外から日本を代表する研究者を評者に招いてスポーツ史学、スポーツ社会学の立場から忌憚なき批評を受けつつ、スポーツ人類学とはなにか、スポーツ人類学に何ができるのかを参加者とともに考えたい。

*** 参加者で希望する方には、本書を謹呈します。希望者は研究会で提示されるメールアドレス宛に、本書を希望する旨メッセージを送信してください。**

■ 評者坂上康博氏プロフィール:1959年、大阪生まれ。高知大学教育学部卒業、東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了、一橋大学大学院社会学研究科博士課程満期退学。福島大学行政社会学部教授(スポーツ文化論担当)などを経て、現在一橋大学大学院社会学研究科教授。主な研究領域はスポーツ史、スポーツ文化論。著書に『昭和天皇とスポーツ』(吉川弘文館)、『につぼん野球の系譜学』(青弓社)、『スポーツと政治』(山川出版社)、『権力装置としてのスポーツ』(講談社)、編著に『12の問いから始めるオリンピック・パラリンピック研究』(かもがわ出版)、『海を渡った柔術と柔道』(青弓社)、共編著に『スポーツの世界史』(一色出版)、『幻の東京オリンピックとその時代』(青弓社)など。



■ニコ・ベズニエ他(2020)
『スポーツ人類学
グローバリゼーションと身体』

世話人:松岡宏高・中川剣人・工藤龍太
早稲田大学 スポーツ科学学術院

E-mail: ryutak77@aoni.waseda.jp



早稲田大学 スポーツ科学学術院
Faculty of Sport Sciences, Waseda University